「放蕩息子のたとえ」　2023年09月08日

「兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、私は何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、私が友達と宴会をするために。子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身代を食い潰して帰ってくると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつも私と一緒にいる。私のものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。喜び祝うのは当然ではないか。』」（ルカ15：28～32）

主イエスは、別の譬えを語られた。ある人に二人の息子がいて、弟の方が父に財産を分けてくださいと言ったので、二人の兄弟に身代を分けてやった。弟は父からの身代を持って、遠い国へ旅立った。ところが、身を持ち崩して財産を浪費し、何もかも使い果たした。無一文になった時、ひどい飢饉が起こって、食べ物にも窮した。彼は、その地方の裕福な人の所に身を寄せたところ、畑で、豚の世話をさせられた。豚には十分な餌を与えていたが、彼には食物がなく、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであった。彼は、身も心もボロボロになり、飢えて死のうとした時、父に守られ、何不自由なく暮らしていたことを思い出した。そして、父の所には雇い人が大勢して、有り余るほどの食料がある。帰る決心をし、父への謝罪と言い訳の言葉を用意した。それが、「お父さん、私は天に対しても、また、お父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」である。彼は、痩せ衰えた体で、父の家を目指した。ところが、父は遠く離れていたのに、息子であることを認め、走り寄って首を抱き、接吻をした。父は息子の帰って来ることを待って、毎日、遠くを見つめていたのではないか。息子は父の暖かい懐で泣き、謝罪したが、「雇い人の一人にしてください」という準備したセリフは言わなかった。父に抱きしめられ、息子の資格はないけども、息子として受け入れてくれる実感を味わったからであろう。父は、一番良い衣を着せ、手に指輪をはめ、足に履物を履かせた。そして、肥えた子牛を屠り、食べて祝おう、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだからと喜び、祝宴を始めた。

畑で働いていた兄は夕方になり家路に向かった。ところが、家の近くに来ると、音楽や踊りの音が聞こえたので、僕の一人を呼んで、これは何事かと問い質した。僕は、弟さんが帰って来られたので、父上が肥えた子牛を屠って祝宴をしていると報告した。兄は怒りが込み上げ、家に入ろうとしなかった。すると、父が出て来てなだめたが、兄は収まらない怒りを父にぶっつけた。父の言いつけを守り、懸命に仕事をし、何年も忠実に仕えてきた。それなのに、友達と宴会をするために、子山羊一匹もくださったことはなかった。ところが、あなたの息子が娼婦どもと遊び惚け、放蕩に身を持ち崩し、あなたの身代を食い潰して帰ってくると、肥えた子牛を屠っておやりになる。父は「子よ、お前はいつも私と一緒にいる。私のものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。喜び祝うのは当然ではないか」と言った。神は死んで居なくなくなった人を懐に迎えて、喜ばれる方だという譬えである。譬えの通り、主イエスは失われた者を見出し、生きることへと呼び起こす言葉と業を表わされた。